

東京大学海洋研究所



ニュースレター

No.20 (中野最終号) 2010.3

●退官にあたって

新しいサイエンスを求めて

海洋科学国際研究センター 教授 宮崎 信之



写真1 宮崎信之(本人)

平成22年1月22日(金)午後3時、海洋研究所の講堂で、120名の先輩・同僚・職員・学生などの方々を前に私の最終講義「海の哺乳動物と私」を無事に終えることができました。また終了後、素晴らしい送

別会を開いて頂き、海洋研究所としても最後の年に定年を迎える教授として感慨深いものがありました。この講義と送別会を企画して下さいました、西田睦・海洋研究所長をはじめ海洋研究所の職員の皆様に心からお礼申し上げます。

思い起こせば、私は1970年から海洋研究所の資源生物部門の西脇昌治先生のもとで、修士課程、博士課程

を通して5年間、イルカの生活史の研究を実施し、1975年3月に西脇昌治先生の指導のもとに博士論文「スジイルカの群構造」を提出し、農学博士号を取得しました。西脇先生のご指導のもとで、この年に論文博士と課程博士の合計7人の研究者が博士号を取得しました。課程博士の私以外は全て論文博士で、鳥羽山照男博士(鴨川シーワールド・元館長)、内田至博士(名古屋港水族館・元館長)、ロバート・ブラウネル博士(NOAAの主任研究者)、千国史郎博士(FAOの上級職員)、正木康昭(水産研究所の室長)、川上武彦(水産研究所の主任研究者)と国内外で活発に活躍されている研究者ばかりでした。同時期に西脇先生から博士論文の審査を受けたこのメンバーの間では、博士号取得者の仲間として年齢を超えた絆が芽生え、これらの先輩諸氏からは、その後公私両面にわたりお世話頂き、私の研究の展開に大きな支えになりました。

西脇先生は、国内の鯨類研究のリーダーとしてだけでなく、世界の第一線の研究者として精力的に国際共同研究を展開されていました。そのため、世界から多くの研究者が西脇研究室を訪れるようになり、そのお陰で、私は研究室にいただけで世界一流の研究者とお話する機会に恵まれました。この時期の出会いが、

その後の私の研究活動にも大いに役立つことになりました。1979年12月には、海洋研究所で「Symposium on Biology of the Dugong(海牛類の国際会議)」が開催されました。私の記憶ではこの会議が海洋研究所で開催された最初の国際会議ではなかったかと思います。会場係として参加した私にとって、この会議は初めての国際会議であり、会議の雰囲気を味わうことができただけでなく、国内外の研究者と交流する貴重な経験でもありました。西脇先生は世界を舞台に活躍され大変多忙な研究者でありながら、海洋研究所の所長職を2期(1967-68と1972-74)も務められ、所長在任中の1973年4月、岩手県大槌町赤浜に海洋研究所附属施設である大槌臨海研究センター(国際沿岸海洋研究センター)を設立されました。1977年には、西脇昌治先生は日本の鯨類研究の第一人者として大村秀雄・日本鯨類研究所長とご一緒に日本学士院賞を受賞されました。先生はサイエンスに対して特別な考え方をお持ちで、教授在任中、私と内藤靖彦氏(国立極地研究所・名誉教授)の2名しか大学院生をとらず、私たち大学院生には「自由な発想でサイエンスに挑戦せよ」ということで、細かいことは何もおっしゃらず、自由に研究をさせてくださいました。学生の細かな指導は、専ら資源生物部門の梶原武・助教授、沼知健一・助手や粕谷俊雄・助手に任せていました。私は、粕谷俊雄先生の研究室に机をもらい、フィールド調査の「いろは」から科学論文の書き方まで、鯨類の調査・研究を通じて研究者として必要な心構えを教えて頂きました。沼知健一先生には、バイカル湖国際生態学センターの日本支部の創設に際し、大変お世話になりました。1988年の旧ソ連邦時代にロシアからの申し出によりアメリカ、イギリス、スイス、ベルギー、日本が中心になって、バイカル湖を世界共通の研究フィールドとし、国際共同研究を展開するバイカル湖国際生態学センターを創設する機運が高まり、この構想に関して日本研究者の参加への打診がありました。当時、日本政府は旧ソ連邦との間で組織的な交流がなく、独自に柔軟に対応できるシステムの構築を模索する必要がありました。沼知先生は遺伝学の専門家として有名な研究者であるとともに、フィールドサイエンスにも造詣が深く、日本研究者を主導する研究者として沼知先生をおいては他に考えられないことから、日本研究者の代表として参画して頂くようお願いにあがりました。沼知先生は、ご多忙にもかかわらず快く引き受けて下さり、その後の日本研究者の基盤の確立に様々な視点から貢献をして頂きました。

日本の研究チームは、文部省の海外学術調査の研究

補助金(代表者:沼知健一・教授)を用いて活発に研究活動を展開し、国際的に優れた研究成果をあげることができました。私は、沼知先生の後を引き受けて、研究代表者として海外学術調査の研究補助金を2期4年間(1995-9)獲得して、約50名の研究者と一緒に国際共同研究を展開してきました。1991年に旧ソ連邦が崩壊し、ロシアとして新生することになりましたが、その政変の最中に私たちの研究チームがバイカル湖で研究を継続していたという予想外の事態に遭遇することになりました。幸いなことに、ロシアと日本の研究者はこの事態に冷静に対応して頂き、全員日本に無事に帰国することができました。その後のロシア社会の政治・経済の混乱時期の間も、ロシア研究者との共同研究は継続され、創立当時のロシアと日本の国際共同研究の基軸と精神を貫きながら、現実の変化に柔軟に対応することで調査を軌道に乗せることに成功しました。

私はバイカル湖のバイカルアザラシの生活史とその環境を主な課題として研究を進めていましたが、研究成果が国際的に評価されることにより、ロシアの研究者からカスピ海に生息するカスピカイアザラシの調査や北極海に生息するワモンアザラシ調査の共同研究の要請を受けるようになりました。実際、現場に足を踏み入れると、これまでに記述されていた知見を超える新しい研究課題が見えてきて、新たな展開ができるようになりました。実際、カスピ海については1回限りの調査の予定が4回まで伸びることになりました。これは、研究者の相互の信頼関係が高まり、互いに新しい発想のもとに、次々と新しい研究成果をあげることができた証拠とも言えます。当初は、海起源のアザラシである近縁な3種類(バイカルアザラシ、カスピカイアザラシ、ワモンアザラシ)の系統進化と有害化学物質による環境のモニタリング研究に絞って研究を進めており、予想通りの成果をあげることができたのですが、それ以外にも新しい知見を次々と得ることができるようになりました。そのひとつの例として、これらの3種類のアザラシがヒト由来のインフルエンザウイルスに感染していることを世界で最初に報告できたことが挙げられます。医学雑誌のランセットの編集者のインタビューを受け、「これまでインフルエンザウイルスの感染についてはヒトとトリについて詳細に研究されてきましたが、今後は野生動物を含めた地球規模のモニタリング研究を総合的に推進して行くことが重要です」と私はコメントしました。記憶に新しい2002年のSARS(重症急性呼吸器症候群)の問題もまさに野生動物との関連性抜きには解決の道がないで

あろうというのが私の正直な気持です。

バイカル湖を中心にカスピ海や北極海を訪れて、ロシアの研究者と国際共同研究を展開しているのと平行して、私は三陸沿岸域の環境問題を岩手県の地域住民、漁業者、水産関係者、行政官、政策決定者と共同して解決できるような新しいシステムを模索していました。当時、岩手県の行政官から、三陸沿岸域の将来の漁業に関して新しい視点からの取り組みを求められました。そこで、岩手県、国際連合大学、海洋研究所が連携した新しいプログラム「海洋環境国際事業」を立ち上げることにしました。その理由として、海洋研究所には国内外で実施してきたサイエンスのノウハウがあり、国際連合大学には沿岸海洋研究を実施している世界の研究者のネットワークがありました。また、岩手県の水産研究者は三陸海域という生物生産の高い魅力的なフィールドで調査・研究してきました。そこで、岩手県に拠点を置く研究者の間で共同研究体制を築くことにより、組織的に研究を展開していくことが可能であり、将来を見据えた新しい研究システムを作れるのではないかと考え、現在直面している沿岸環境問題を中心とした計画案を作成しました。幸い、当時、岩手県の増田寛也・知事（後の総務大臣）は私の提案した計画案を快く受け入れて下さり、特別予算を計上してくれました。最初の企画として、1998年10月29日-11月2日に国際会議「人間と海」を開催することになりました（写真2）。世界の第一線の海洋学者60名を招

聘し、最新の情報をもとに現在問題になっている海洋環境の課題をlocal-regional-globalの視点から議論するとともに、今後の対応について意見交換を行いました。この会議は、J. A. van Ginkel・国際連合大学長、林梓・UNESCO日本大使、西澤潤一・岩手県立大学長の協力を得て、一般の人々にも公開して渋谷の国際連合大学、盛岡の岩手県立大学、釜石の三陸博記念館で開催されました。同時に、招聘した研究者には三陸沿岸域の漁業活動を視察し、漁業関係者との意見交換を実施して頂きました。最終日の総会では、この国際会議を契機に三陸沿岸域をモデルにした研究プログラム「海洋環境国際共同研究事業」を展開する必要があるとの勧告を受けました。これを受けて、4年間隔で国際会議を開催し、研究成果を総括するとともに、地元の人々への公開講演会や中学生・高校生との交流会を開くことにしました。このプロセスを通じて、漁業者、水産関係者、行政官、政策決定者だけでなく、一般市民や次代を担う若者にも「人間と海」の関係を良く理解してもらい、自からの意志で環境保全を積極的に推進するようなシステム作りを目指しました。このプロジェクトは1999-2006年の8年間にわたり活発に実施され、この活動を通じて漁業者、水産関係者、行政官、政策決定者、一般市民、および若者の意識の向上に効果があったことが実感されました。先に述べた国際会議「人間と海」の概要は「Mankind and the Oceans (United Nations Press, 2005)」, 国際連合大学・岩手県・



写真2

1998年10月29日に国際連合大学で開催された国際会議「人間と海」出席者の集合写真



写真3

1997年10月5日に大槌臨海研究センターへの天皇・皇后両陛下の御行幸啓の写真。

海洋研究所による一連の活動の詳細は「三陸の海と生物(サイエントス社、2006)」に記述されておりますので、一読をお勧め致します。

1997年10月5日に「第17回全国海づくり大会」が岩手県大槌町で開催され、この大会に御臨席された天皇・皇后両陛下は、大会終了後、大槌臨海研究センターを訪問されました。平啓介・海洋研究所長、川口弘一センター長をはじめセンターの職員一同で両陛下をお迎えし、貴重なひとときをもつことができました(写真3)。両陛下にはセンターを出発される際にセンター職員にねぎらいのお言葉をかけて頂き、職員にとっては大変感慨深いものがありました。1999年11月10日、秋篠宮殿下をお迎えして沿岸海洋研究の特別会議を浪板観光ホテルで開催しました。セミナー終了後センターにもお越し頂き、人間と野生動物との共生(共存)について議論をさせていただきました。殿下は大槌町のさけ・ます孵化場の湧水の池に生息しているイトヨが生存の危機に直面していることを知り、イトヨの保護に積極的な働きかけを行い、2002年11月には、「イトヨシンポジウム」を大槌町城山公民館で開催することになりました。このシンポジウムは一般の人々にも公開され、大槌町民の間にも「生物保護と環境保全」という新しい概念が理解されるようになっていきました。

「生物多様性の保護」や「沿岸環境保全」は、国際

的に最重要課題として認識されるようになってきました。私は、これを基本理念として、大槌臨海研究センターを中心に、local-regional-globalの視点から研究活動を展開し、沿岸海洋学の確立を目指すことが重要であるとの認識の基にセンターの改組案を作成し、東京大学を通じて文部科学省に提案させていただきました。幸いなことに、文部科学省の理解を得ることができ、2004年に組織改革が行われ、新たに「国際沿岸海洋研究センター」として、第一歩を踏み出すことができました。旧組織では教授1名と助手4名で構成されていましたが、新組織では教授2名、助教授2名、助手2名、国外客員助教授1名、国内客員教授1名で構成することが可能になりました。この一連の作業は、元海洋研究所長であった小池勲教授や寺崎誠教授の積極的な支援がなければ成就しなかったと思います。お二人の献身的なご尽力に心からお礼申し上げます。

国際沿岸海洋研究センター(旧大槌臨海研究センター)の職員は、全国共同利用者の研究活動の支援や、施設の維持管理など多岐にわたって活躍してきました。船長の盛田孝一氏は、全国共同利用者に対する献身的な尽力が認められ、現役のスタッフでは珍しく日本動物学会から感謝状が贈られました。芝恒男・助手は下関水産大学の助教授(就任後直ちに教授に昇進)、竹内一郎・助手は愛媛大学農学部の教授、都木靖彰・助手は北海道大学水産学部の教授、天野雅男・助手は

帝京科学大学の助教授を経て長崎大学の水産学部の教授へと、次々と新しい職場に転進され、センターで培ったノウハウを生かし、新しい職場で活発に研究を展開されています。乙部弘隆氏は助手から講師に昇任し、新井崇臣氏は助手から准教授に昇任し、活躍されています。

私は、1993年に海洋研究所附属大槌臨海研究センターの教授として赴任した際に、沿岸海洋環境の学問の確立を目指しておりました。特に、大槌臨海研究センターの将来を考えると、local-regional-globalの視点で沿岸海洋環境研究を展開していくことが重要であるとの認識で、全国共同利用の研究者のご協力を得て展開することになりました。なかでも、有害化学物質（有機塩素系化合物、有機スズ化合物、重金属など）による海洋汚染の問題は国際的課題にもなっていることから、大槌湾でのケース・スタディーを確立してそのノウハウを世界に拡大し、新しい視点から海洋汚染研究を展開することを目指しました。この活動は、後に関係するJSPS大学拠点多国間プログラム「沿岸海洋科学」の研究にも結びつくことになりました。新井・准教授もこの分野で活躍しておられ、現在、アジア諸国の研究者との国際共同研究を積極的に展開しています。

私は、2003年に10年間お世話になった大槌臨海研究センターから海洋科学国際共同研究センターに移動し、JSPS大学拠点多国間プログラム「沿岸海洋科学」（2001-2011）に本格的に関わることになりました（写真4）。このプログラムにはインドネシア、タイ、マレ

ーシア、フィリピン、ベトナムの5ヶ国と日本の25大学・研究機関から350名が登録されており、アジア諸国の中核メンバーとして沿岸海洋学研究に積極的に関わってもらっています。植松光夫・教授、道田豊・教授、西田周平・教授、井上広滋・准教授にも積極的にこのプログラムに参加して頂き、事務部の協力を得てこのプログラムをスムーズに運営してきております。これまでに、4回のセミナーと80回を超えるワークショップ・トレーニングコースなどを開催するとともに、17編の出版物、700編以上の原著論文を出版してきました。以前は、インドネシアと日本、マレーシアと日本、タイと日本というようなJSPSの2国間プログラムでスタートしたのですが、それらの活動を集約して2001年から多国間拠点大学プログラムを立ち上げてきました。この間、関係者のご尽力により優れた成果をあげてきていることから、プロジェクト終了の2011年以降も、アジア諸国との沿岸海洋学に関する国際共同研究が継続できることを期待したいと思います。JSPSなどの関係者の一層のご理解とご支援をお願いしたいと思います。

私が海洋科学国際共同研究センターに移動した際に目指したことは、サイエンスとして国際的に主導できるシステムを創成することでした。それには、これまでにない日本独自の機器を開発して、海洋科学の新しいサイエンスの構築が必要でした。日本の海洋科学の歴史をみると、主要な観測機器類は欧米のものが多く使われていることから、是非、在任中に日本独自の機



写真4 2005年8月26日に東京大学農学部弥生講堂で開催されたJSPS多国間拠点大学プログラム「沿岸海洋学」の第2回国際セミナー出席者の集合写真。

器類を開発して新しい海洋科学研究が展開できことを模索しておりました。バイオリギング研究の日本の創成者である内藤靖彦・国立極地研究所教授（海洋研究所の初代客員教授）とお会いして、彼のバイオリギング研究にかける深い見識と熱い気持ちに心が動かされ、彼が定年後、海洋研究所が彼の意志を受け継いでバイオリギング研究をさらに発展させてくれないかとのご相談を受け、一緒にバイオリギング研究を展開することになりました。幸い、前海洋研究所長の寺崎誠教授の力強い支援を受けてバイオリギング研究「先駆的海洋科学創成に向けた革新技術の開発事業－世界最先端のバイオリギング・システムを用いた海洋動物の水中行動と海洋環境研究－(2007-2012)」を海洋研究所のプロジェクトのひとつに加えて頂きました。このプロジェクトでは、日本のエレクトロニクス技術を最大限に生かして、私たち研究者が必要とする情報を収集することが可能な機器の開発を目指し、世界最小のデータロガーORI3GTD(φ12mm, L: 45mm, W: 9g)（海洋研究所製作）や新しいカメラロガー（DSL380-VDTII: φ22mm, L: 133mm, W: 82g, Memory: 4Gbit, S x GA: 1280 x 1024 dot）（国立極地研究所製作）などの開発に成功しました。これらの機器を使用して、世界の研究者と共同で鯨類、鰐脚類、海亀類、海鳥類、魚類を対象にした優れた研究を展開することが可能になりました。この手法を用いた研究に大学院生も強い関心を持ち、あらゆる水棲動物を対象種に游泳行動やその環境に関する研究成果が次々と蓄積されています。これ

らの機器を使用することによって海洋動物の生態だけでなく、生理的なメカニズム、さらには地球規模の環境モニタリングにも貢献するものと期待されております。西田睦・所長を中心に、竹井祥郎・教授、佐藤克文・准教授、小松輝久・准教授などの強力メンバーを擁した共同研究チームの今後の展開が期待されます。

私は、諸先生や先輩方によるご指導ならびにご支援のもとで、大学院生と研究生としての6年間と教授としての17年間の合計23年間を海洋研究所で研究生活を送ってきました。その間、海棲哺乳動物を対象にした研究、有害化学物質による海洋汚染研究、バイオリギング手法を用いた研究を、日本近海はもとより、南極海、北極海、ベーリング海、南太平洋、バイカル湖、カスピ海、アジア諸国沿岸域などで展開して来ました。この一連の研究では、基本的に自らのアイデアを大切に研究を推進するとともに、フィールドで得た知見を生かして、さらに質の高い研究に発展させ、新しい研究分野にチャレンジすることができました。このように私がフィールドサイエンスを基盤にした海洋研究を展開し、充実した研究生活を送ることができたことは、海洋研究所の職員および研究室の大学院生（博士号取得者：12名、修士号取得者：23名）の協力無しにはなし得ませんでした（写真5）。お世話になりました皆様方に心からお礼申し上げます。最後に、私のために創作していただいた酒井総子氏の和歌「太古より 生きとし生けるものみな 母なる海をともに 守らん」を添えて、筆を置きたいと思います。



写真5 2010年1月22日に海洋研究所の講堂で開催された送別会の際に撮影された集合写真（私の左側は同じ年に定年を迎える原政子氏）。

●退職にあたって

初めての淡青丸

環境動態分野 技術専門員 永江 英雄

海洋研究所に入所したのは1974年の4月です。大学卒業後初めて社会にでた訳です。当時の研究所の建物はA棟だけでB棟は工事中でした。配属された研究室は資源環境部門（旧名）で建物の階段を上がった2Fの正面の部屋と隣の東側を使用していました。スタッフは教授、助手、技術補佐の3名と学生のこじんまりした部屋でした。

初めて淡青丸に乗船したのは入所した年の夏の事です。大槌湾の調査でしたが大槌で乗船して湾口を出たのは良いのですが波が高かったためすぐに戻ってきました。この時すでに船酔いしていましたが酷くなる前に戻ってきたので本格的な船酔いはまだ体験しなかったのです。まだ船酔いの恐ろしさを経験していない事になります。

大槌のセンターの建設はこの頃から始まったかと思っています。センター予定地の近くの旅館に泊まった記憶があります。今は港が綺麗に整備されていますが当時は何も無かったです。

その後B棟が完成し3Fに引越しました。ですがどんな感じだったのかはよく覚えていません。そして淡青丸による本格的な観測に参加したのが11-12月にかけてです。東京を出航してまずは相模湾の中央あたりに向かいました。そこで理化学研究所の方々が係留を行ったのですが私には見る物すべて初めてですし経験です。

この時にアンデラ流速計なる機器を初めて知ったのです。海洋研究所には当時まだこれは導入されていなかったかと思います。海底から海面までの立ち上げでトップのブイは海表面に出ている係留を採用していました。ちなみに当研究室で最初に導入された流速計はジオダインという名称で黄色の円筒計でかなり重い物でした。

係留は昼間の作業でしたがこの後海が荒れ出したの

です。冬型になり北風が強くなり船が揺れ初め夕方にはすっかり船酔い状態になっていました。でもってその後寝たきり状態になりどういう風に観測をこなしたのか覚えていないのです。一度島影に避難したのを記憶している程度です。相当痩せたんじゃないでしょうか。

その後1週間ほどの観測を終えてから相模湾に戻ってきました。この頃になってようやく息を吹き返した次第です。相模湾に戻って行う作業は係留系の回収です。しかしいくら探せど系は見つかりませんでした。おそらくアンカーが海底を離れ流されてしまったのでしょう。これでメインブイを表面まで出してしまうのはかなり危険を伴うということをはからずも勉強させられました。

最後に観測が終わって打ち上げなど行っていました。が気分がすぐれない私は酒を口にする事はありませんでした。私が淡青丸に乗船して酒を飲めるようになるのには3年くらい経過してからでしょうか。そして淡青丸に乗れば船酔いするものだと意識出来るようになり船酔いとうまく共存出来るようになりました。

1年に1-2回ほど乗船し月日は流れいつの間にか定年を迎える事になりました。実際には家庭の事情により1年早まってはいますが、まあそれだけ長く在籍していた事は変わりません。ちょうど海洋研究所が柏に移転するという節目にあたりました。移転後もさらなる研究所の発展をお祈りしております。



船上観測作業中の筆者近影

●中野海洋研での思い出「ひとこと」(順不同)

書庫スペースが足りなくて対応に苦労しました。

小松陽一 (2001-2003図書係/現・情報基盤センター
図書館システム係)

海洋研といえば、サッカー。院生時代後半と教員として戻ってきてからの計7~8年間、毎日サッカーし続けました。時には怪我したり(D論発表会の3日前に足骨折した)、仲間と喧嘩したりもしましたが、教職員・学生関係なく、日常を忘れてプレーに没頭しました。サッカー部がなかったら、研究を続けていなかったかもしれません。私にとってはそれほどまでに、この中野キャンパスの生活の全てでした。

サッカー部のみんな、本当にありがとう。柏に移ってから、この人の繋がりを大切にしていきたいと思います。

岡英太郎 (海洋大循環分野)

こんにちわ、さようなら

はじめてこの中野の海洋研図書室に来たのは1988年でした。当時、小冊子として発行されていた附属図書館広報誌『図書館の窓』の取材のために訪問して、Challenger ReportをはじめとするExp.コレクションを拝見し、古い洋書の装丁が劣化して困っているというお話をうかがった記憶があります。

約20年後、海洋研図書室に異動になりました。昭和の香りがする建物のいささかレトロな図書室で、ボロボロになった革装丁本にセルロース溶液を塗布したり、カビの発生した製本雑誌に掃除機をかけてアルコールで拭いたり、ある意味貴重な体験ができました。数か月かそれとも1年後ぐらいには、この図書室も含めて中野の海洋研がなくなっていると思うと、ちょっと不思議な気持ちです。中野での幕引きに立ち合わせていただくのは、何かの縁でしょうか。それとも、チャレンジャーの呪い?

濱田すみ子 (図書係)

たのしい思い出

医学図書館(本郷キャンパス)から海洋研図書室(中野キャンパス)へ平成6年4月から平成9年3月まで、お世話になりました。

前任者である織田熙子さんが定年で、引き継ぎを受けた後の江戸寿司が実に旨かった事をよく覚えております、ここのおやじさんはキハダ鰯だけを扱い『とろ』が食べたいと思っても、『とろ』と言わず鰯の握りと

注文すれば食べられたのであります、もちろん赤身の値段でね!

平成7年から8年の夏は猛暑で昼休み時間にプールを利用しました、水なんてもんじゃなく、かといって温泉温度でなく、なま暑いプール水で、私はもっぱらシャワーを浴びていました、職場の同僚に『プール行きませんか』と言ったら凄い顔で睨まれたのを覚えています。

仕事に関しては研究室が足りないと言うことで図書スペースを縮小したことですかね、あまり良く覚えていませんが、海洋研の学生(院生)教官には腕っ節の強い方がたくさんいて心強かった3年間でした。

小出正男 (1994-1997図書係/現・法学部閲覧係)

新宿に近くて便利だったし、インドカレーやラーメン屋も近くにあり、いい場所だった。次は拍でがんばります。

東真幸 (海洋科学国際共同研究センター)

振り返ってみると、A棟の地下で生化学部門(現生元素動態分野)と仲良く研究していたこと、大雨になるとB棟地下のRI実験室に附属グラウンドの水が流れ込み大慌てで駆け付けたこと、C棟に移った飼育室でいろんな実験をしたこと、昼休みの発散テニス、などが思い出されます。期待と不安が相半ばの中野からの船出ですが、柏では新しい研究系内や研究系間の連携が深まることを期待しています。

竹井祥郎 (生理学分野)

A棟の屋上から眺められる東京の空と間近な超高層ビル群の風景が好きでした。最後の年には日食も見られて満足です。

柳瀬亘 (海洋大気力学分野)

この世に生き残る研究所は最も強いものでも、最も頭のいいものでもない、変化に対応できる研究所だ。新しく変貌する研究所に乾杯!

植松光夫 (海洋科学国際共同研究センター)

晴れた日には屋上から富士山が望め、目の前に広がる新宿夜景を眺めながらの中屋上でのバーベキューは中野キャンパスならではのでした。商店街のおじちゃんおばちゃんがいつも温かかったです。

中山典子（海洋無機化学分野）

いざ一言を書こうと中野キャンパスでの生活を振り返ってみても、周辺の美味しいお店のことばかりが頭に浮かびます。いや、本当にいいところでした。中野キャンパスは。

福田秀樹（国際沿岸海洋研究センター）

学生の時と戻ってきてからと合計すると、これまでの人生の1/3近くを海洋研で過ごしている計算になります。しかも、そのうちの大部分の期間は研究所から徒歩圏内に住んでいて、中野のキャンパスと街には長い間お世話になりました。古くて狭い建物ですが、まちなかの便利な場所でけっこう過ごしやすかったです。

伊賀 啓太（海洋大気力学分野）

昔、本当の教授会の会場は、会議室ではなく「みずむらや」だった、と聞いたことがあります。

野村英明（微生物分野）

8年間、いっぱい運動しました。ありがとうございました。

昆健志（分子海洋科学分野）

中野の海洋研に通い始めたのは、娘がまだ小学校低学年の頃。その娘が今では三十路を超えてしまいました。D棟前の桜、デコボコのテニスコート、附属のプールからの歓声、そして屋上から見る夕焼けの富士山と新宿の夜景。いつまでも心に残るであろう海洋研の風景です。

金原富子（海洋底地質分野）

海洋研で忘れられない出来事は、庭のサザンカに茶毒蛾が、大発生してしまった事です。10年から20年の周期で、異常気象の次の年に発生することが多いそうで、永野係長が異動していらした年に発生しました。一日をかけて、係長が一人で海洋研の外の塀から路地に伝い出て来る茶毒蛾を、足でつぶして箒でかき集めていましたが、次の日には大変な事になってしまいました。体が、茶毒蛾の細かい毛によって、かぶれてしまったのです。その後、完治するまでには、1週間くらいかかりました。風にのって、それが付着するだけ

で、かゆくなり赤くはれました。何人の方が、原因がわからずにかゆみを感じた事と思います。その後サザンカは、植木業者さんによって、剪定されましたが、業者さんは、茶毒蛾の怖さを知っているので、十分に時間が経ってからの、作業でした。皆様もご注意ください。

高橋悦美（施設係）

いざ引越しとなると、この古い建物にも南台にも愛着がわき、ちょっと寂しくなってきました。狭くてあちこちにある書庫には大変苦勞させられましたが、いい思い出です。

金井尚子（図書係）

毎年桜が楽しみでした。長い間お世話になりました。

清宮実佐子（分子海洋科学分野）

ここ中野にはずいぶん長く通いました。私が就職したのは、技術職員が各分野に2~3人いた時代です。分野事務専門の技術職員もいました。事務職員の移動も少なく、所員全体が仲良しでした。事務職員と技術職員と教官が、家族連れで参加したスキーツアーがあったなんて、今では信じられませんね。古き良き時代だったということなのでしょう。

塚本久美子（HADEEP）

中野キャンパスで働き始め、気がつけば10年以上の年月が過ぎていました。長い間大変お世話になりました。中野キャンパス、ご苦勞さまでした。

早乙女伸枝（生元素動態学分野）

10年近く通勤しましたが、いまだ一部の棟の配置が分からずじまいです。朝、蛇口をひねると茶色い水が出るのが衝撃的でした！

渡辺由紀子（新領域事務局）



「温室効果 (Greenhouse effect) 研究中の海洋研 (1996)」西川淳 (浮遊生物分野)



「中野で見納めの桜 (2009春)」清宮美佐子 (分子海洋科学分野)

●中野海洋研の思い出アルバム

～ 日々、お世話になりました ～



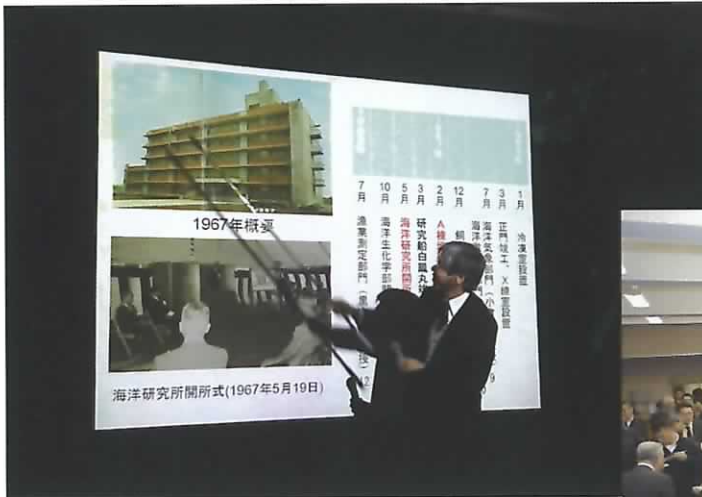
～ 部活動、交流試合などで大いに活用したグラウンドとコート ～



～ 色々な風景も楽しめました ～



～ 中野海洋研お別れ会（2009年12月10日講堂にて） ～



～ 2010年3月、いよいよ引越が始まりました ～





長い間
お世話になりました!

東京大学海洋研究所

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

Tel : 03-5351-6342

Fax : 03-3575-6716

ホームページ : <http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/>